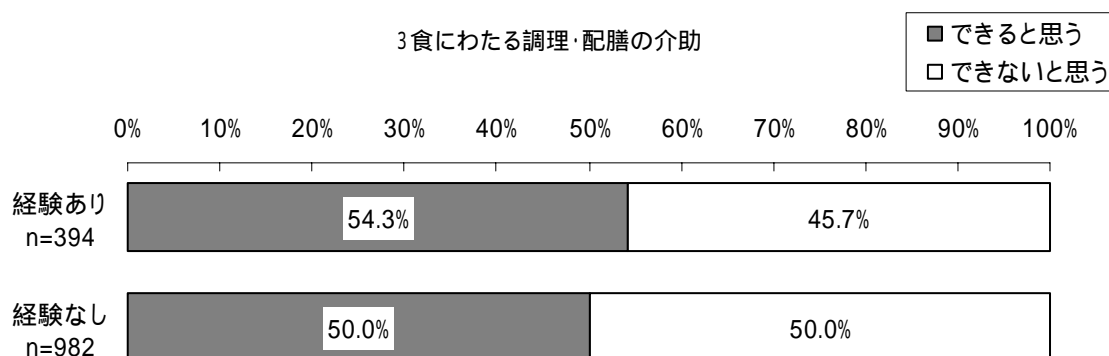
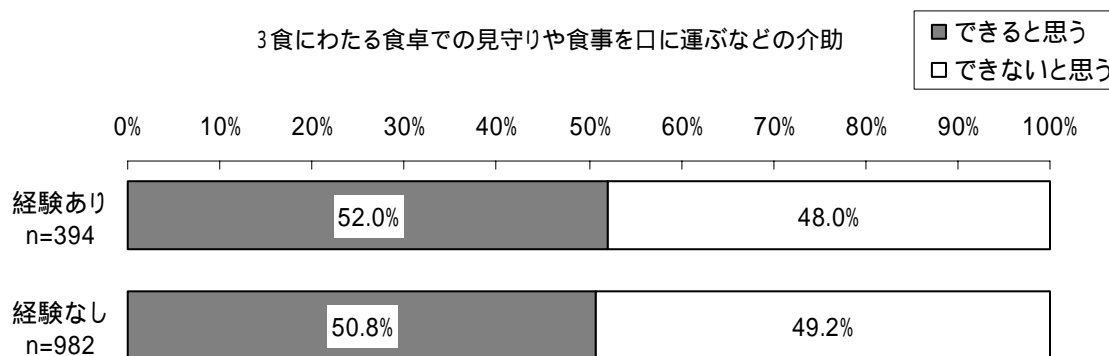


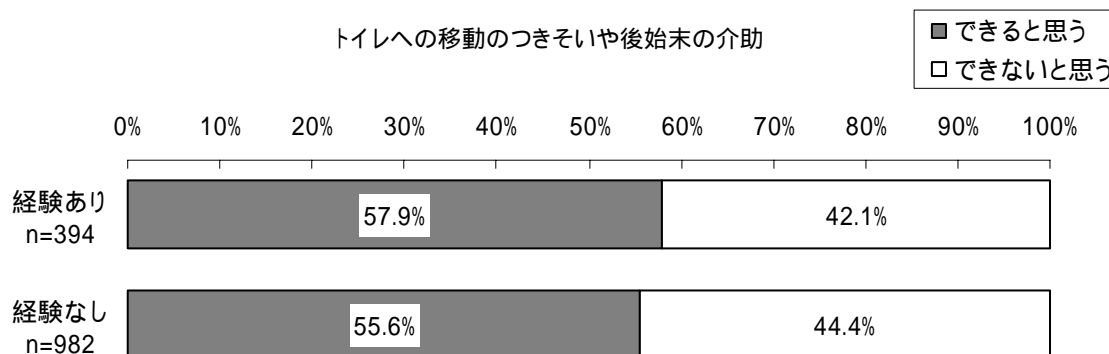
## 5) 家族の看護・介護経験と可能な介助項目との関係



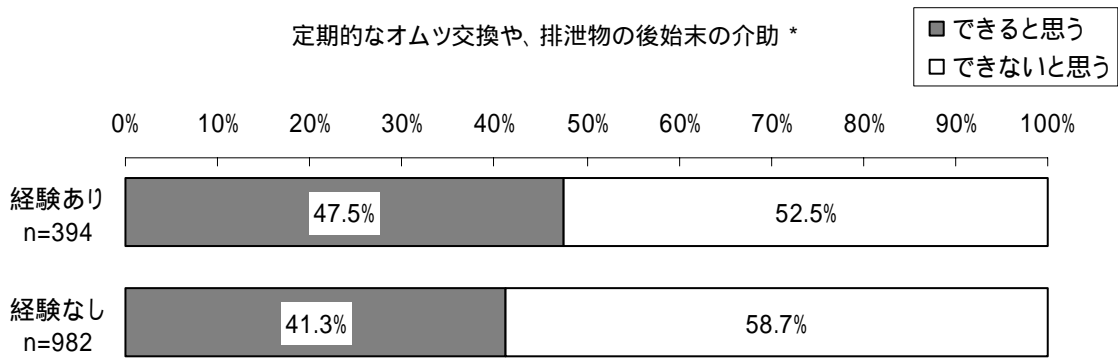
家族が「3食にわたる調理・配膳の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では54.3%、「経験なし」群では50.0%であった。



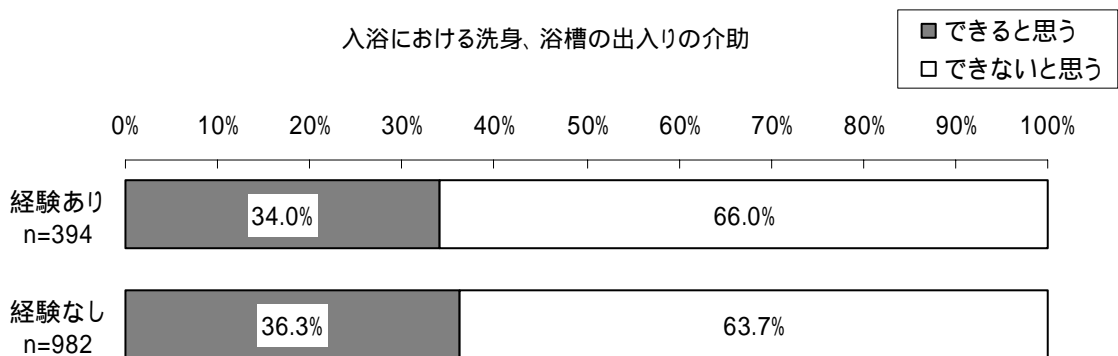
家族が「3食にわたる食卓での見守りや食事を口に運ぶなどの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では52.0%、「経験なし」群では50.8%であった。



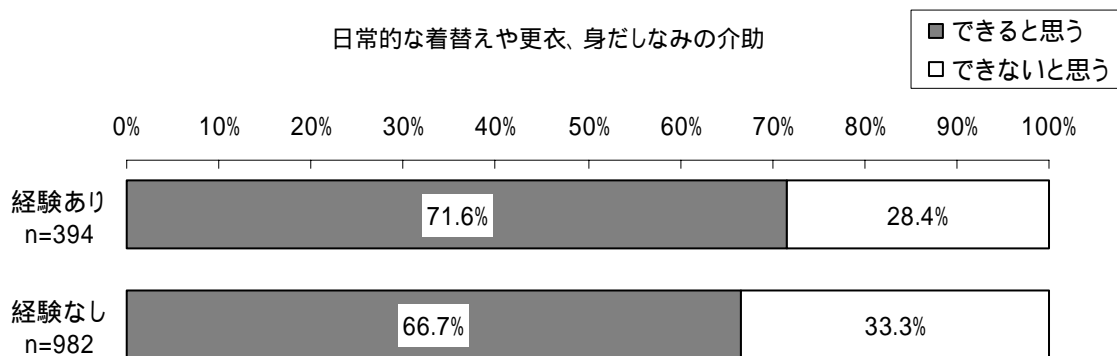
家族が「トイレへの移動のつきそいや後始末の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では57.9%、「経験なし」群では55.6%であった。



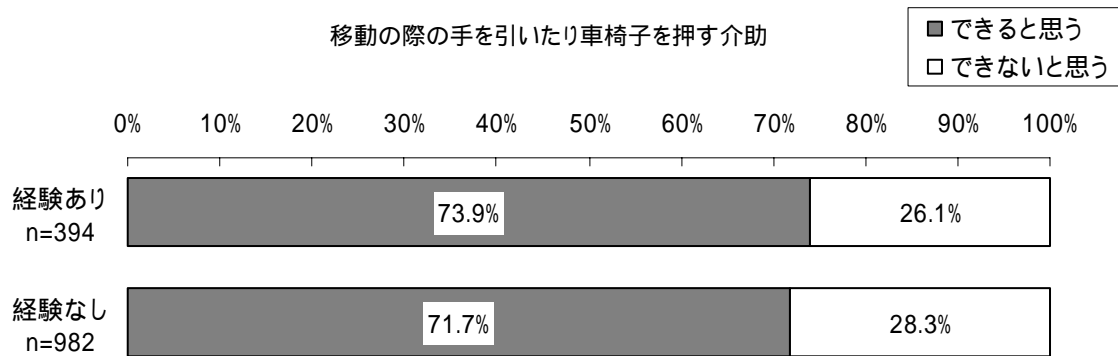
家族が「定期的なおムツ交換や、排泄物の後始末の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では47.5%、「経験なし」群では41.3%であり、統計学的に有意な差が認められた。



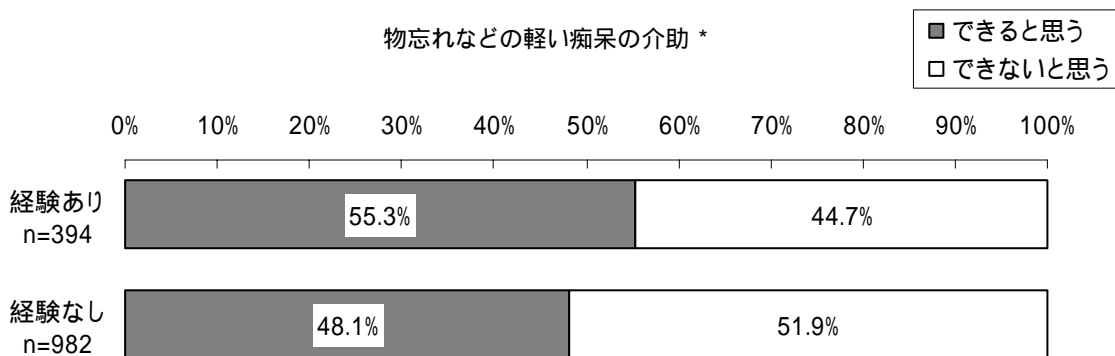
家族が「入浴における洗身、浴槽の出入りの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では34.0%、「経験なし」群では36.3%であった。



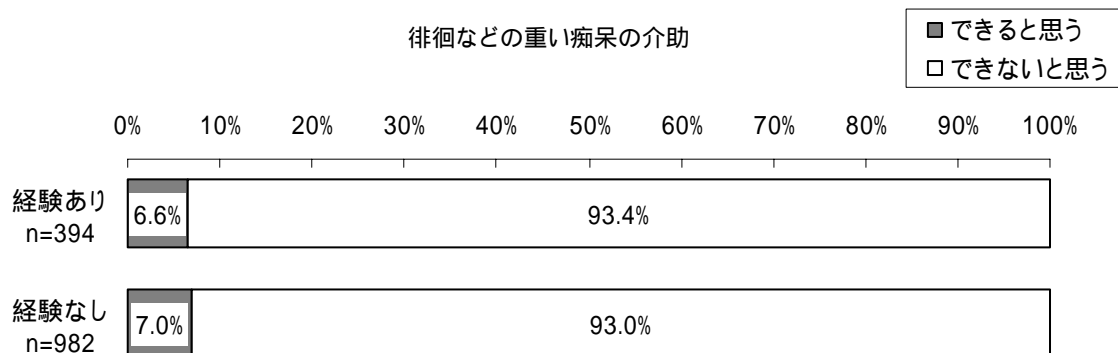
家族が「日常的な着替えや更衣、身だしなみの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では71.6%、「経験なし」群では66.7%であった。



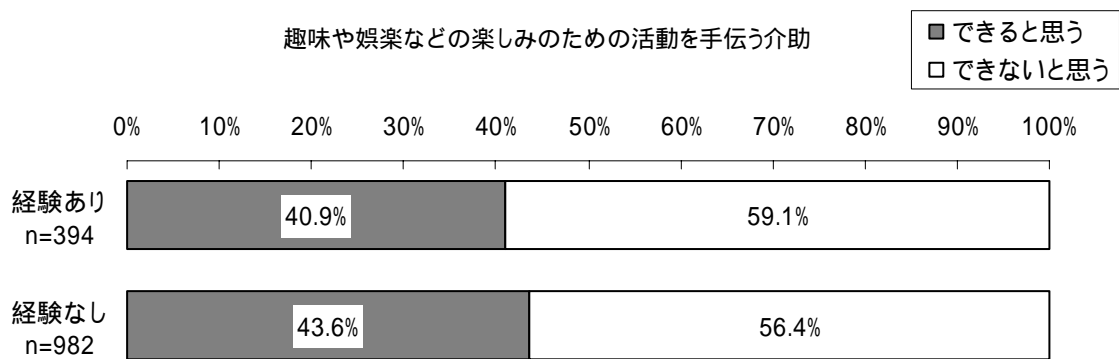
家族が「移動の際の手を引いたり車椅子を押す介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では 73.9%、「経験なし」群では 71.7%であった。



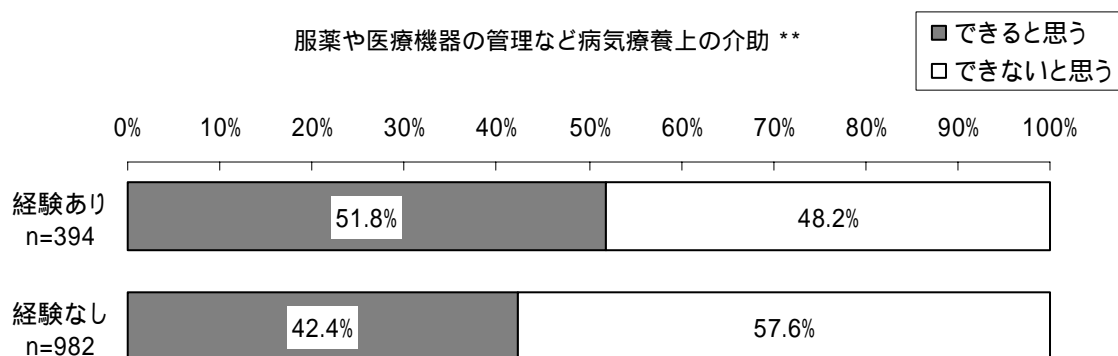
家族が「物忘れなどの軽い痴呆の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では 55.3%、「経験なし」群では 48.1%であり、統計学的に有意な差が認められた。



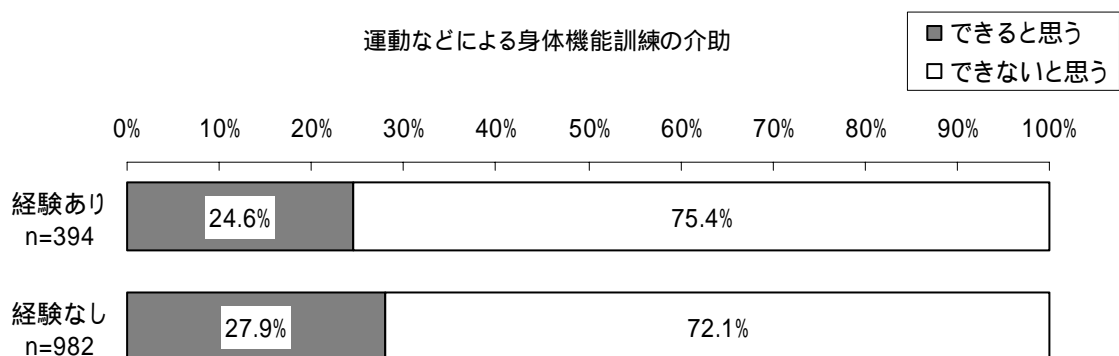
家族が「徘徊などの重い痴呆の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では 6.6%、「経験なし」群では 7.0%であった。



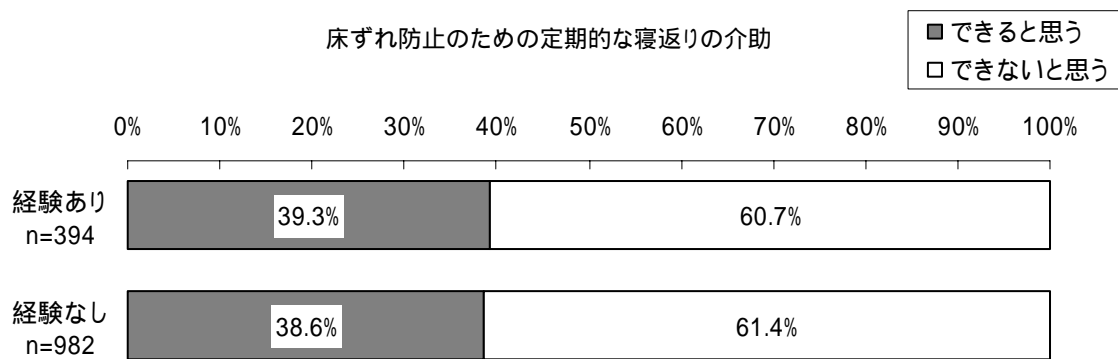
家族が「趣味や娯楽などの楽しみのための活動を手伝う介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では40.9%、「経験なし」群では43.6%であった。



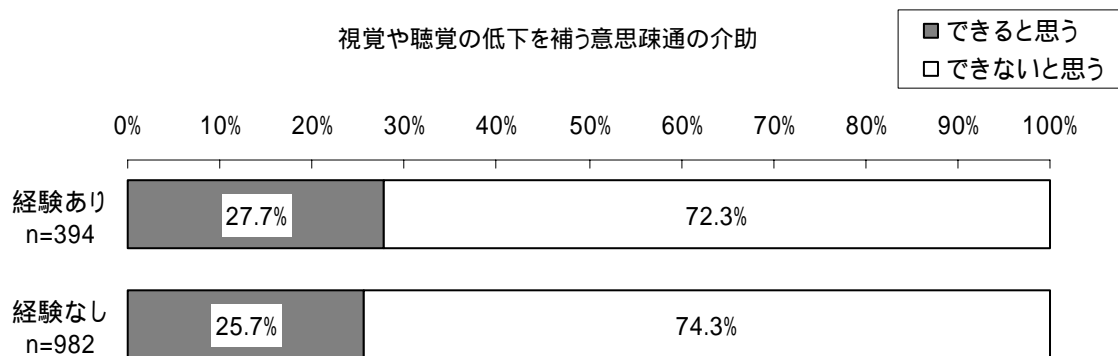
家族が「服薬や医療機器の管理など病気療養上の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では51.8%、「経験なし」群では42.4%であり、統計学的に有意な差が認められた。



家族が「運動などによる身体機能訓練の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では24.6%、「経験なし」群では27.9%であった。

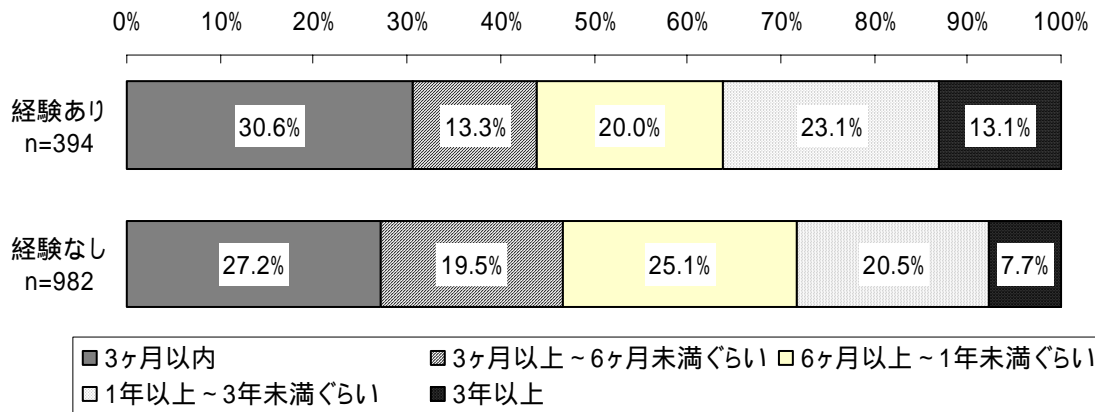


家族が「床ずれ防止のための定期的な寝返りの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では 39.3%、「経験なし」群では 38.6%であった。



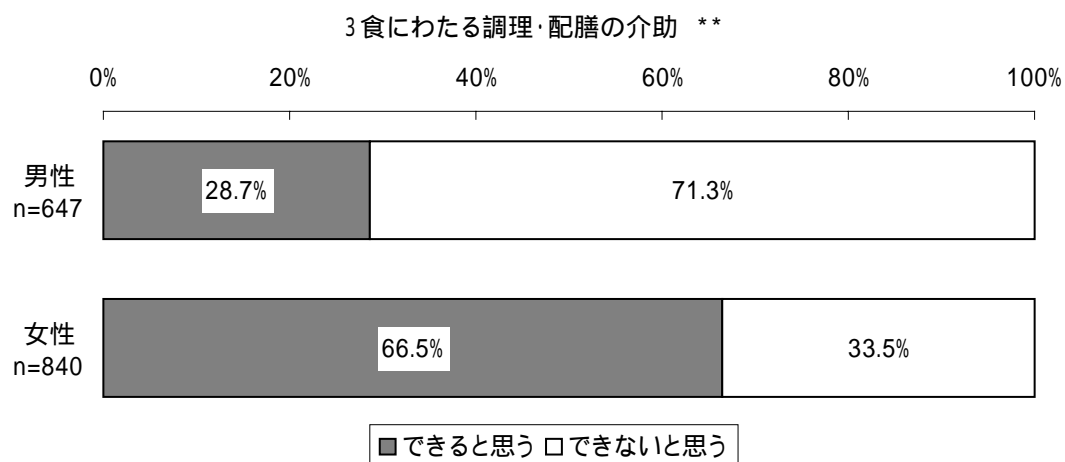
家族が「視覚や聴覚の低下を補う意思疎通の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、家族看護・介護経験の有無別にみると、「できると思う」割合は「経験あり」群では 27.7%、「経験なし」群では 25.7%であった。

可能と考えられる家族介護の期間 \*\*

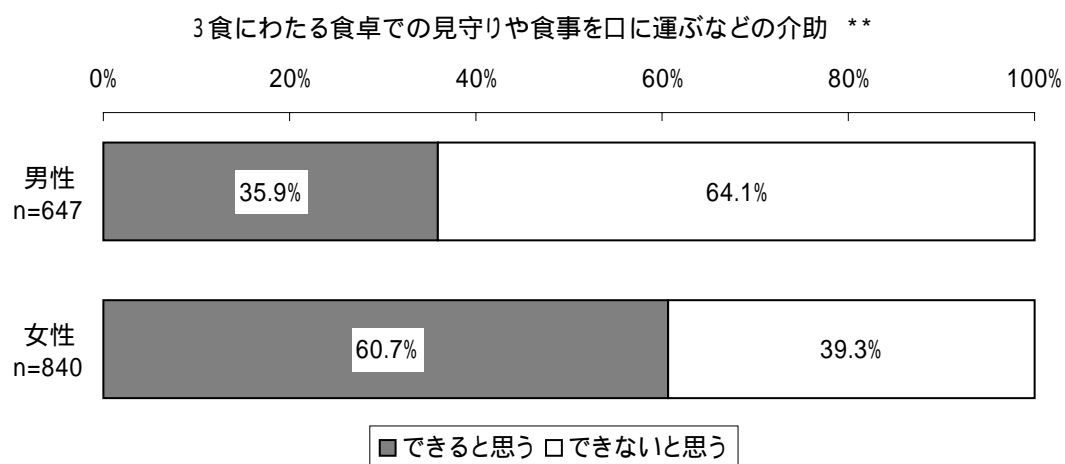


家族が何らかの介護を必要とする状態になった場合にその介護ができると思う期間を、家族看護・介護経験の有無別にみると、「経験あり」群では「3ヶ月以内」が最も多く（30.6%）、次いで「1年以上～3年未満ぐらい」（23.1%）、「6ヶ月以上1年未満ぐらい」（20.0%）、「3ヶ月以上～6ヶ月未満ぐらい」（13.3%）、「3年以上」（13.1%）であった。また、「経験なし」群では「3ヶ月以内」が最も多く（27.2%）、次いで「6ヶ月以上1年未満ぐらい」（25.1%）、「1年以上～3年未満ぐらい」（20.5%）、「3ヶ月以上～6ヶ月未満ぐらい」（19.5%）、「3年以上」（7.7%）であり、統計学的に有意な差が認められた。

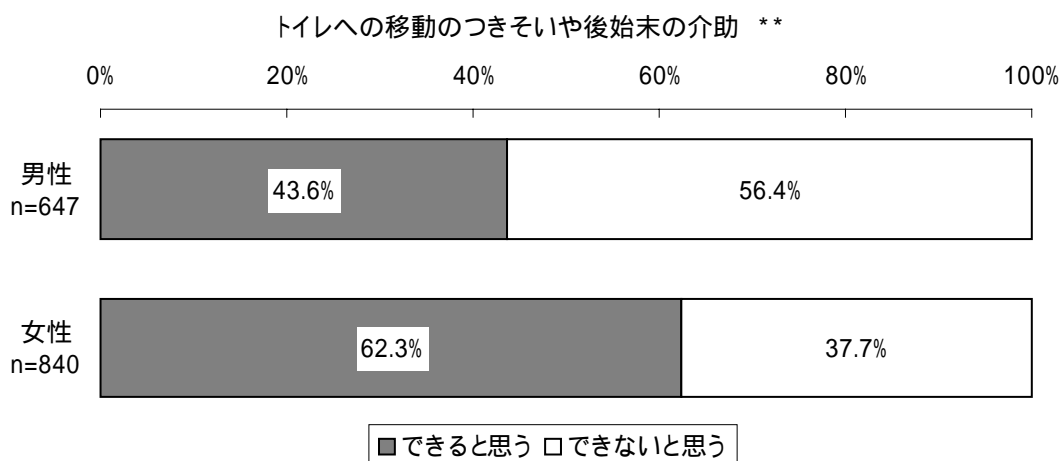
## 6) 性別と可能な介助項目との関係



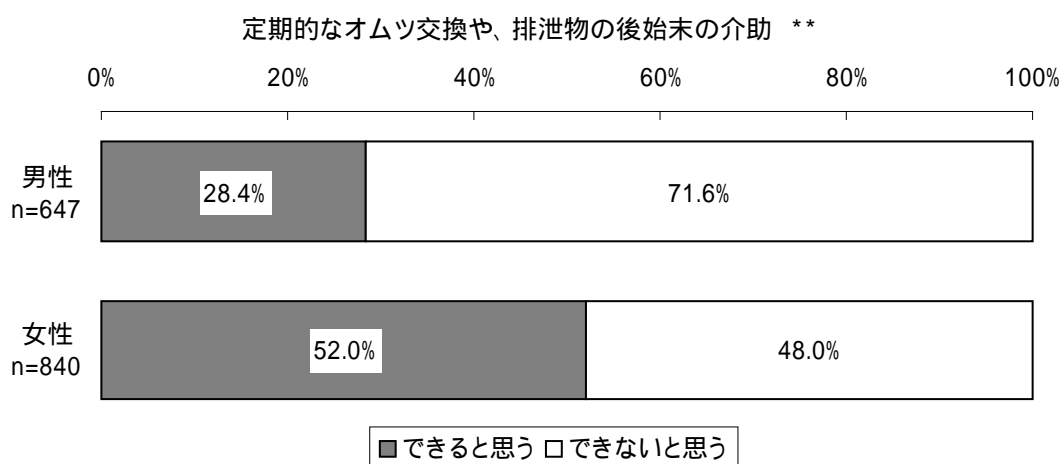
家族が「3食にわたる調理・配膳の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では28.7%、女性では66.5%であり、統計学的に有意な差が認められた。



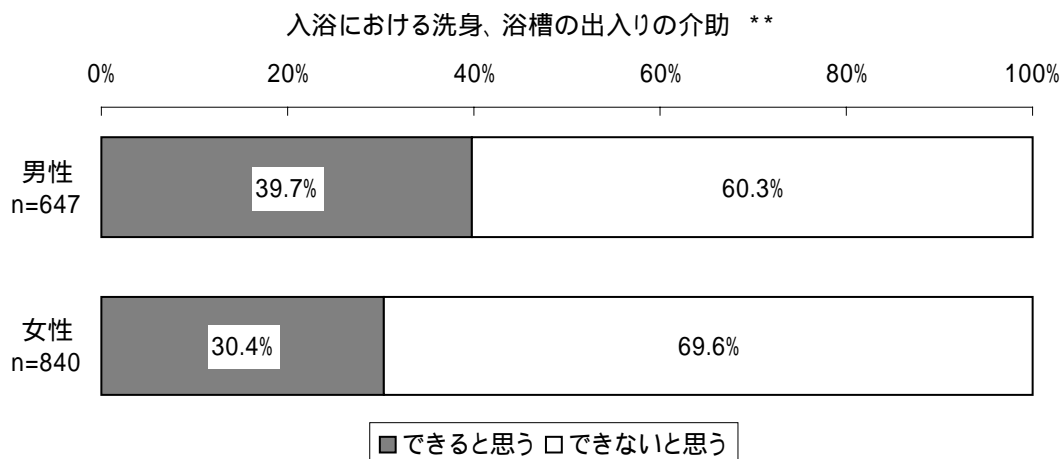
家族が「3食にわたる食卓での見守りや食事を口に運ぶなどの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では35.9%、女性では60.7%であり、統計学的に有意な差が認められた。



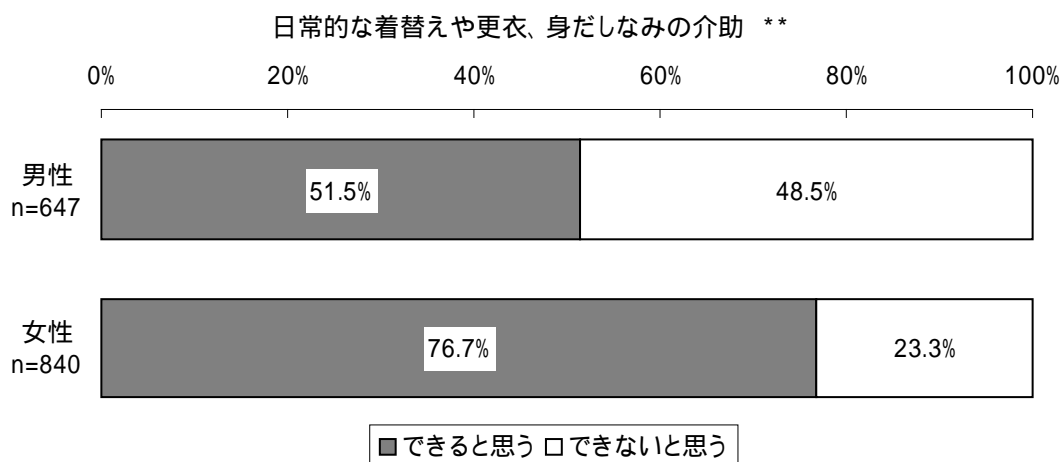
家族が「トイレへの移動のつきそいや後始末の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 43.6%、女性では 62.3%であり、統計学的に有意な差が認められた。



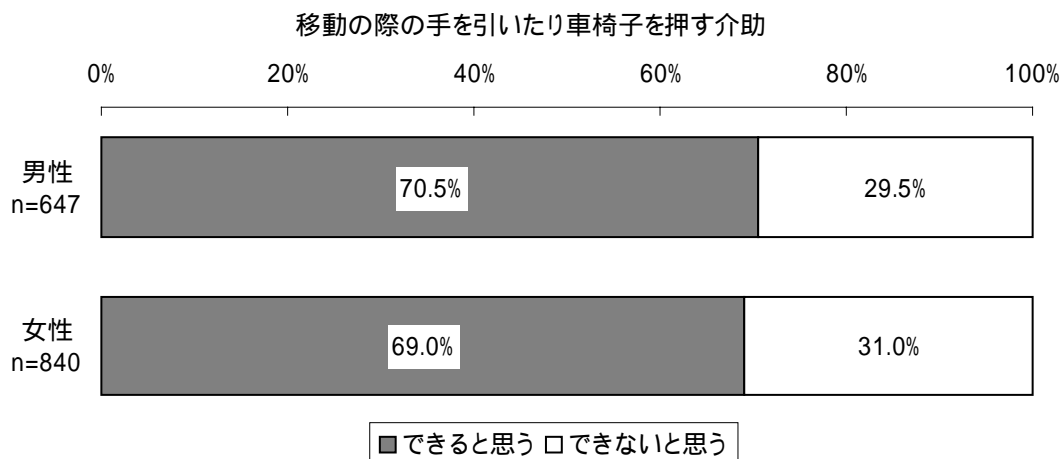
家族が「定期的なおムツ交換や、排泄物の後始末の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 28.4%、女性では 52.0%であり、統計学的に有意な差が認められた。



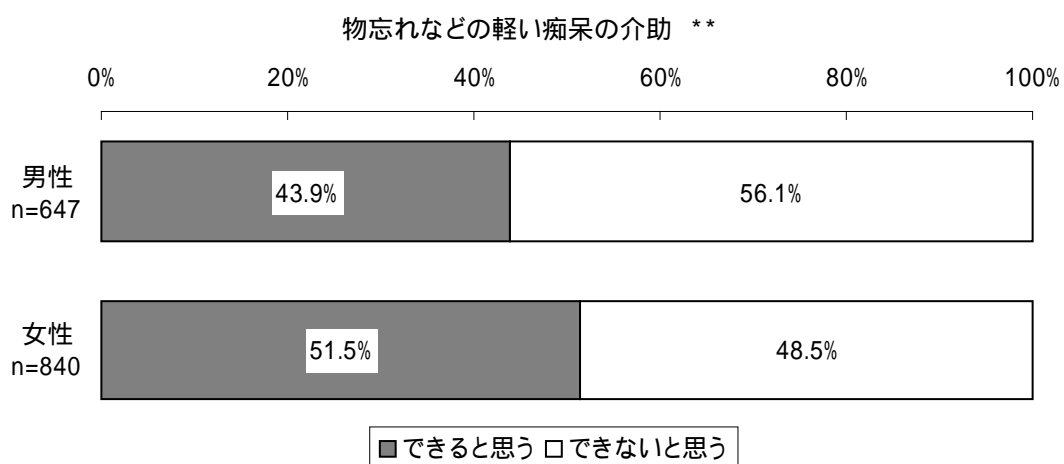
家族が「入浴における洗身、浴槽の出入りの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 39.7%、女性では 30.4%であり、統計学的に有意な差が認められた。



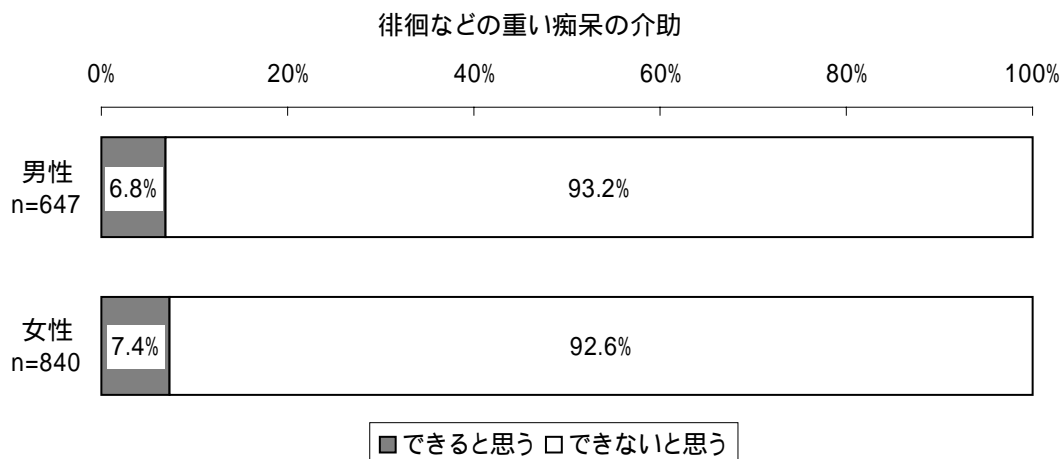
家族が「日常的な着替えや更衣、身だしなみの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 51.5%、女性では 76.7%であり、統計学的に有意な差が認められた。



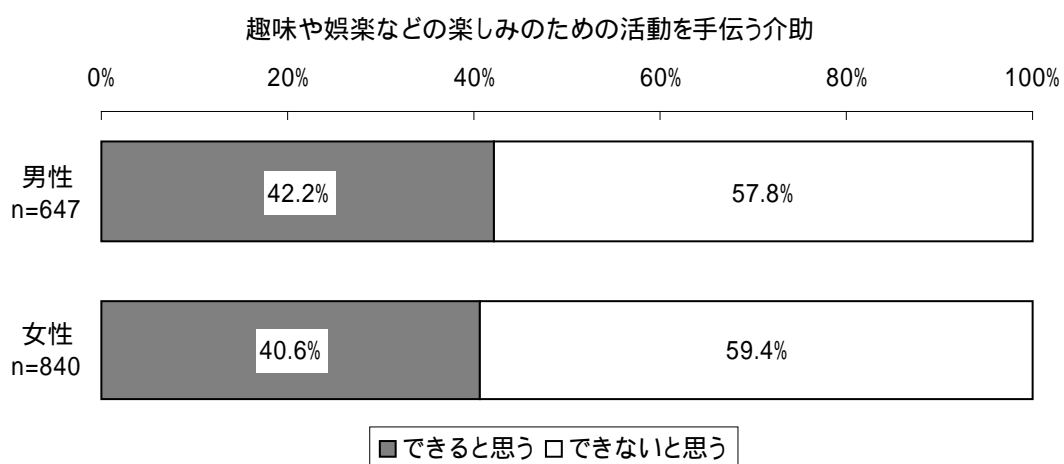
家族が「移動の際の手を引いたり車椅子を押す介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では70.5%、女性では69.0%であった。



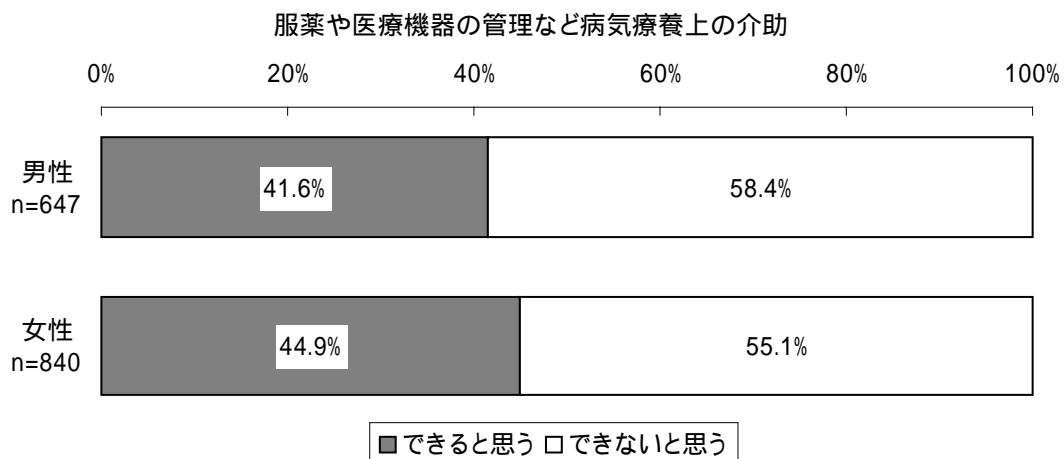
家族が「物忘れなどの軽い痴呆の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では43.9%、女性では51.5%であり、統計学的に有意な差が認められた。



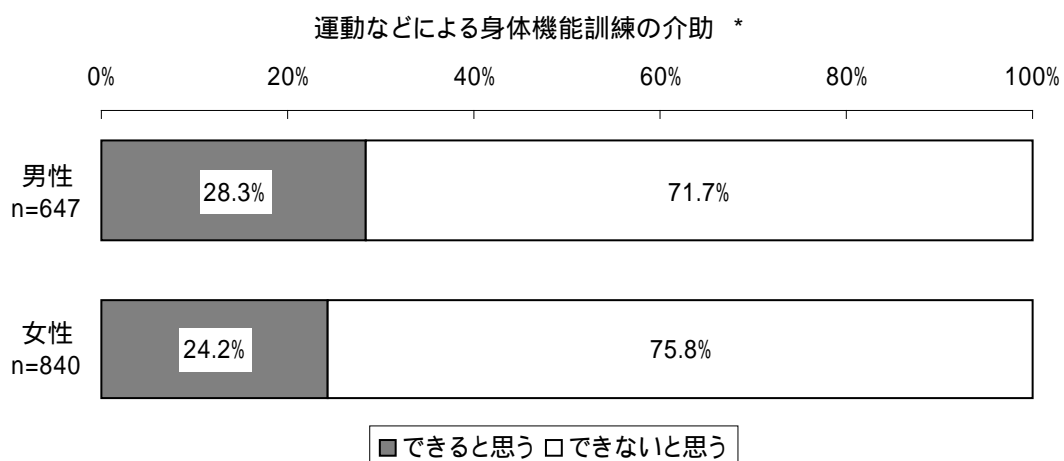
家族が「徘徊などの重い痴呆の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 6.8%、女性では 7.4%であった。



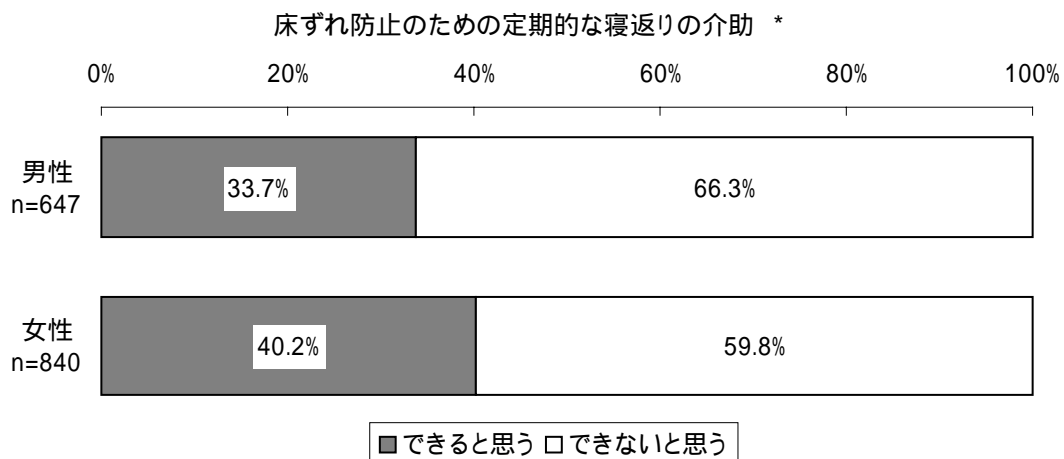
家族が「趣味や娯楽などの楽しみのための活動を手伝う介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 42.2%、女性では 40.6%であった。



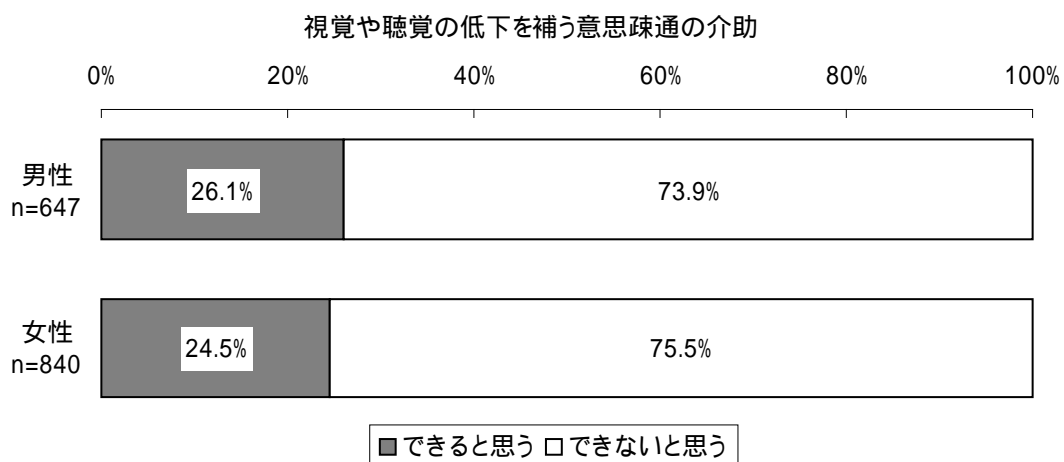
家族が「服薬や医療機器の管理など病気療養上の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では41.6%、女性では44.9%であった。



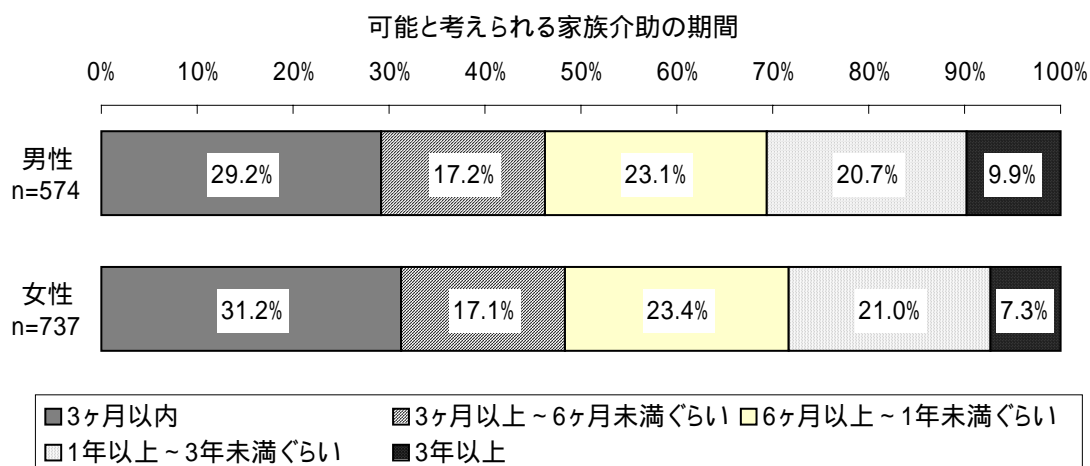
家族が「運動などによる身体機能訓練の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では28.3%、女性では24.2%であり、統計学的に有意な差が認められた。



家族が「床ずれ防止のための定期的な寝返りの介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 33.7%、女性では 40.2% であり、統計学的に有意な差が認められた。



家族が「視覚や聴覚の低下を補う意思疎通の介助」を必要とする状態になった場合にその介助ができると思うかどうかを、性別にみると、「できると思う」割合は男性では 26.1%、女性では 24.5% であった。



家族が何らかの介助を必要とする状態になった場合にその介助ができると思う期間を、性別にみると、男性では「3ヶ月以内」が最も多く（29.2%）、次いで「6ヶ月以上～1年未満ぐらい」（23.1%）、「1年以上～3年未満ぐらい」（20.7%）、「3ヶ月以上～6ヶ月未満ぐらい」（17.2%）、「3年以上」（9.9%）であった。また、女性では「3ヶ月以内」が最も多く（31.2%）、次いで「6ヶ月以上～1年未満ぐらい」（23.4%）、「1年以上～3年未満ぐらい」（21.0%）、「3ヶ月以上～6ヶ月未満ぐらい」（17.1%）、「3年以上」（7.3%）であった。